

2. 主催等挨撈 他

(1) 主催者挨拶

世田谷区教育長 渡部 理枝

世田谷区教育長の渡部理枝でございます。本日は、共生社会ホストタウン推進事業「心のバリアフリーシンポジウム」にご参加いただき、誠にありがとうございます。開会にあたり、主催者の世田谷区を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。



本日は、日本大学文理学部の協力のもと、車いすラグビーのアメリカ代表のパラリンピアンの方をお招きし、講演やパネルディスカッションを行い、参加されている皆様とともに障害理解を深め、共生社会の実現を目指すことを目的としています。

また、サプライズゲストとして、テレビ番組「ノーサイドゲーム」にご出演され、皆様もよくご存知のラグビー元日本代表キャプテンの廣瀬俊朗さんを司会進行役としてお招きし、さらに華やかに開催できることになりました。

世田谷区は、アメリカ合衆国のキャンプ地として、選手団をオリンピック・パラリンピックで迎えますが、平成29年12月に都内の自治体としてははじめて、国の共生社会ホストタウンとして登録され、さらに、これまでの区の先導的・先進的な取り組みを評価いただき、10月11日に「先導的」共生社会ホストタウンに認定されました。

取組内容をご紹介しますと、区立小中学校において高齢者・身体障害者疑似体験を通じた「障害理解教育の実施」、多彩なチームが参加するボッチャ世田谷カップの開催などを通じた「障害者スポーツの推進」、馬事公苑までのルート上のサイン整備や段差改修の実施などを通じた「ユニバーサルデザインのまちづくり」、シンポジウムなどを通じた「心のバリアフリー」を柱として、オリンピック・パラリンピックやパラリンピアンとの交流をきっかけに共生社会の実現を目指すため、様々な取組を実施しております。

このあと、パラリンピアンの方からアメリカの先進的な取組みをご紹介いただき、午前中に行った下高井戸商店街のまちの点検を踏まえ、心のバリアフリーについて、様々な立場でご活躍されている方の貴重なご意見が交わされることと思います。世田谷区としましても、このシンポジウムが、共生社会の実現に向けた、力強いメッセージを発信する場となることを心から期待しております。

最後になりますが、本日ご参加の皆様のご健勝をお祈り申し上げるとともに、本シンポジウムの開催にご尽力いただきました、日本大学文理学部様、アメリカ大使館様、下高井戸商店街振興組合の関係者の皆様には、改めて感謝を申し上げまして、私からのご挨拶といたします。

(2) 共催等挨拶

日本大学文理学部学部次長 岡 隆 氏

本日は、日本大学文理学部にお越しいただき誠にありがとうございます。文理学部次長をしております、岡隆です。本来であれば、紅野学部長から御挨拶申し上げるところですが、本日は公務のため、私より御挨拶を申し上げます。



さて、世田谷区は、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックアメリカ選手団のキャンプ地となっております。その世田谷区に位置する我々日本大学文理学部は、世田谷区との連携・協力に関する包括協定を締結して、お互いの人的交流、知的・物的資源の相互活用を図り、地域社会の持続的な発展に貢献するべく、努力しております。

日本大学文理学部のなかにも、かつてはさまざま大きなバリアがありました。それらは、段差など建築にかかわる物理的なバリアだけでなく、身体的な障害をもった人や、精神的・心理的な障害をもった人に対する、心無いステレオタイプや偏見、差別などの心理的なバリアです。

物理的なバリアについては、これまでも、さまざまな障害を抱えた教職員や学生や地域のみなさんの助けも借りながら、その解消に努め、今では、歴史的建造物を除いてはほぼバリアフリー・キャンパスが達成されているのではないかと自負しております。

一方、心理的なバリアについては、ここ10数年、多様性と包摂を目標にしてさまざまな取組みをしてきましたが、心理的なバリアのなかには意識化すらできない根深いものがあることに気づかされております。しかし、解消が困難とはいっても、手をこまねいているわけにはいきません。心のバリアフリーを目指して、一つひとつ積み重ねていくことが肝要と心得ております。

本日、文理学部社会福祉学科と共に、心のバリアフリーを目指した、世田谷区主催のこのようなシンポジウムを共催できることを心より嬉しく思っております。

2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックにおいて、アメリカ選手団の皆様のご活躍を心より祈念し挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。

Kelsey De Rinaldis Speech
Kokoro no Barrier Free Symposium

アメリカ大使館 広報・文化交流部
文化担当補佐官
ケルシー・デリナルディス 氏

*Setagaya-ku no
minasan,
konnichiwa !*



My name is Kelsey De Rinaldis. I'm the Assistant Cultural Affairs Officer for the Public Affairs Section at the U.S. Embassy in Tokyo. Thank you for inviting me here to the *Kokoro no Barrier Free Symposium* today. We are pleased to provide *koen* to this symposium.

And thank you for your generous hospitality and continued partnership in making a home for Team USA. Through this partnership with the Setagaya Ward Office, we have hosted various sports programs including Olympic Swimmer Anthony Ervin's clinic this past August, and Paralympic Wheelchair Rugby Player Chuck Aoki's school visit to Futako Tamagawa Elementary School last Thursday. Setagaya has already been a wonderful host, and we are learning the warmth of Japanese hospitality – *omotenashi*.

世田谷区の皆さん、こんにちは。

アメリカ大使館広報文化交流部、文化担当補佐官のケルシー・デリナルディスと申します。本日は心のバリアフリーシンポジウムにお招き頂きありがとうございます。このシンポジウムをアメリカ大使館より後援させて頂き、嬉しく思っております。

皆さま方にはチームUSAのホストタウンとして、そして継続的なパートナーシップを通じて我々を温かく受け入れて頂いていますこと、心より感謝致します。世田谷区さんとのパートナーシップを通してこの8月にはオリンピック水泳金メダリスト、アンソニー・アービン選手の水泳教室を開催したり、先週木曜日には車いすラグビーのチャック・アオキ選手による二子玉川小学校への学校訪問が実現しました。世田谷区による心温まる日本のおもてなしを受け、私たちも学ぶ事がたくさんあります。

Today, we are excited that Setagaya invited our friend Chuck Aoki, along with his teammates Joe Delagrave, Josh Wheeler, and Chuck Melton who will share the American views and how the Americans with Disabilities Act (ADA) has changed the lives and perspectives of Americans.

As they will highlight more in detail later, while the ADA ensures that people with disabilities have the same rights and opportunities as everyone else, there are still challenges and much rooms for improvement. I hope that today's symposium serves as an opportunity for Japanese and Americans to learn from each other, and for us to work toward our mutual goal of creating a barrier free society.

Thank you again for hosting us and Team USA. We look forward to continuing our partnership with you for a successful Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games. *Gambarimasho!*

本日は私たちの友人でありますチャック・アオキ選手を始め、彼のチームメイト、ジョー・デラグレーブ選手、ジョシュ・ウィーラー選手、そしてチャック・メルトン選手を迎え、アメリカの価値観や、障害を持つアメリカ人法、いわゆるADA法が、アメリカ人の生活や考え方に与えた影響などについて語って頂きます。

彼らより後程詳しい話がありますが、ADA法により障害を持つ方たちに健常者と同様の権利と機会が保障された一方で、社会には多くの課題と改善の余地があります。このシンポジウムが、バリアフリー社会を構築するという、日米共通の目標に向かって、お互いから学び合う機会になれば幸いです。

改めまして、チームUSAを始め、我々を温かく迎えて頂きありがとうございます。今後ともパートナーシップを通じて、東京2020オリンピック・パラリンピックの成功に向けて共に盛り上げていきたいと思っております。頑張りましょう！

(3) 車いすラグビー、「Thank You, Japan」キャンペーン紹介

車いすラグビーとは・・・

ラグビーやバスケットボール、アイスホッケーなどの要素が組み合わさった球技。バスケットボールと同じ広さのコートを使い、専用の車いすに乗った選手が4対4で対戦する。車いす競技のなかで唯一、車いすでのタックルが認められており、激しいぶつかり合いも見どころの1つ。



講演に先立ち、スペシャルゲストの廣瀬俊朗氏により、車いすラグビーの概要が説明され、また競技を紹介する映像も上映された。

今回登壇したアメリカ代表パラリンピアン4名は、前日の「車いすラグビーワールドチャレンジ2019」という大会で見事、優勝したメンバーであり、拍手で迎え入れられた。



国際親善キャンペーン「Thank You, Japan (サンキュージャパン)」

「東京2020オリンピック・パラリンピック大会がもたらすポジティブなレガシーに貢献し、オリンピック・パラリンピックの価値を日本の人々と共有すること」を目的とした、米国オリンピック・パラリンピック委員会のプロジェクトが発表された。Team USAの選手は、本キャンペーンを通じて、来夏行われる大会のホスト国を務める日本の人々への感謝を伝え、文化を体験し、競技の外で、日本との交流、ジュニア向けスポーツクリニック、またTeam USAの漫画の作成を含む日本文化とのふれあいなどのイベントを予定している。

会場内では、マスコミを対象とした、パラリンピアンがロゴを掲げてのフォトセッションも行われた。

